



Title	ミネアポリスのアメリカ陸軍情報部 日本語学校における語学兵の養成 : 山崎豊子『二つの祖国』に描かれた太平洋戦争下の日本語教育
Author(s)	徳永, 光展
Citation	語文. 2024, 122, p. 119-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98215
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ミネアポリスのアメリカ陸軍情報部 日本語学校における語学兵の養成

——山崎豊子『二つの祖国』に描かれた太平洋戦争下の日本語教育——

徳 永 光 展

1 問題の所在

山崎豊子『二つの祖国』は、1980年6月26日号から1983年8月11日号まで「週刊新潮」に158回にわたって連載され、完結後に新潮社から出版された。このテキストでは、第二次世界大戦下で日米が交戦状態となったために、アメリカ国内で適性外国人とみなされるようになった日系アメリカ人が描かれている。彼らの言語能力は世代や成育歴の違いによって様々である。一世は青年に達するまで日本で育った後に渡米した日本語を母語とするグループであり、労働者として過酷な日々を渡米後過ごしているために、英語を十分に習得する余裕のない人生を送ってきた。逆に純二世はアメリカで生まれ、アメリカで教育を受けているため、英語が母語となり、日本語の能力に乏しいケースも少なくはない⁽¹⁾。そのような日系二世に対する一世の接し方をスケッチするならば、塚本美恵子が述べるように「教育方針は、日米の「かけはし」となる人材育成を目指した日米両文化の習得を基本方針としたが、実際には子どもたちの現地文化習得が進んだことから、日本の教育を主とし現地の教育を従とすべき（日主現従）とする意見と、現地の教育が主で日本の教育を従とする考え（現主日従）があり、政治的な思惑や政策もからみ様々に揺れ動いた⁽²⁾」のである。「親から最も大事なこととして教えられたことは何か」と言えば、「①親とのコミュニケーションにおいて、日本語ができないことによるコミュニケーション不足が最も大きな問題だった、②言葉以外の無言のメッセージを強く感じていた、③日本語と日本文化に対する喪失感がある、④差別・キャンプ体験⁽³⁾」といったような現象が前景化してきていた。

そのような中であって、特異な傾向を示すのが⁽⁴⁾帰米した二世の⁽⁵⁾実態であった。困難な道であるとはいえ、日米の為替レートの差により、日本で教育を受けさせれば低廉であることに加えて、日本語習得を願う一世の親の期待を背負って渡日し、日本で学校教育を受けつつ、バイリンガルに成長するケースもあった。

門池啓史は「帰米二世」の概念を次のように概括している。

- (1) 戦前アメリカで生まれながらも、幼少期に日本に渡った。
- (2) 小学校は日本で終了し、一〇台半ばか、後半の時アメリカへ帰国した。帰国時期は太平洋戦争勃発（一九四一年一月）以前である。
- (3) 例外も多いが、日本語が彼らの母語であり、英語はあくまでも第二言語で、彼らの英語の発音は日本人的である場合が多い。
- (4) 戦前日本の軍国全体主義的教育の影響を受けたためか、彼らの精神的背景は日本人的要素が強い。
- (5) 日本とアメリカで育ち、しかもその二つの国が交戦したという歴史があり、その精神土壌は複雑である。⁽⁶⁾

しかしながら、アメリカ側が日英両語を縦横に使いこなし、戦場で活躍できる人材を求めるならば、このグループ以外には可能性がないというべきであった。

結局、アメリカは日本との戦争を制するには、日本軍の動きを正確にキャッチし先手を打てるように攻撃を仕掛けると共に、日本軍兵士を適切に投降させるために高度の日本語でコミュニケーションを取れる人材が軍隊に必要不可欠と判断し、玉石混交を十分に承知の上、若干でも日本語に触れた経験のある日系アメリカ人を集めて日本語習得に向けて特訓をする。その結果として生まれた「語学兵は、大戦中は太平洋戦線において日本兵捕虜への尋問、通訳、日本軍の獲得文書の翻訳、無線の暗号解読など、通訳と翻訳の任務に関わり、大戦末期には沖縄で日本語による民間人への投降呼びかけもおこなった。」⁽⁷⁾存在（佐藤けあき）であった。

主人公・天羽賢治や彼をライバル視しながら生きるチャーリー田宮は、高度な日本語力を体得した二世であった。二人は共に戦局が深まる中、ミネアポリスのアメリカ陸軍情報部日本語学校で情報戦を制するために日系人を集めて養成される語学兵への日本語教育を担当する教官として勤務する。そこでの教材には長沼直兄が開発した『標準日本語讀本』⁽⁸⁾読解もあったが、捕虜文書の報告文や玉砕を告げる文面もあり、高度な漢字の読みや漢文調の文体の解説、さらには草書体の読解方法にまで発展した。また、教授内容は地理や武士道など日本事情に関する分野にまで及んだのである。その結果、首席卒業のケネス阿川のように戦後には極東国際軍事裁判（東京裁判）で賢治と共に、言語モニターを務められるまでの逸材を輩出するまでの成果を取めた。チャーリーの誘いで日本語教育の世界に賢治は足を踏み入れたが、その役割を自らに課せられた天命として納得させることで、教師として不安を抱えながら学習する生徒に対してできる限りの責務を果たそうと努力した姿が描かれている状況に鑑み、本稿では、賢治が教官として当事者となった日本語教育の状況⁽⁹⁾を分析しながら、アーミー・メソッド（Army Specialized Training Program / ASTP）

と呼ばれもした戦時下における教育方法の描写が『二つの祖国』というテキストで生んでいる効果について論じたい。

2 先行研究

『二つの祖国』において、天羽賢治が施した日本語教育の評価を試みた研究はまだ見られないものの、山崎豊子が扱ったアメリカ陸軍情報部日本語学校における語学兵養成の実態に関しては、ジェームズ・C・マクノートンによる詳細な分析が発表されている。その記述を追うと、「戦前に東京のアメリカ大使館が活用していた三年間で日本語を習得する長沼詔画をもとにして、陸軍日本語学校は、六ヶ月で日本語を遮二無二つめ込むカリキュラムを作って急場を凌いだ⁽¹⁰⁾」が「『長沼詔本』(通称『長沼教本』)などの教材に徐々に改良を加え不足部分の補足もした⁽¹¹⁾」という。「人種からみた日本人の特性」(ジョン・フジオ・アイソ)、「日本史」「日本軍国主義の制度上の問題点」(シゲヤ・キハラ)、「日本帝国主義 過去と未来」(トシオ・ジョージ・ツカヒラ)などが執筆・講義され、「特別な主題は日本の文化と歴史から軍用語(兵語)にまで及んだ⁽¹²⁾」が、加えて「日本語学校は学生に映画をみせ⁽¹³⁾、教師が日本人捕虜、生徒が尋問役になって「捕虜尋問⁽¹⁴⁾」する練習もさせたという。

また、学習内容や学習量に関しては柳田由紀子に解説がみられるのであるが、「語学学校の学科は、日本語の翻訳や会話といった基本の他に、日本の歴史、地理、⁽¹⁵⁾ 候文、草書、日本軍用語、方言、尋問技術など専門分野にもおよんだ。授業は日中七時間、夜間二時間の一日合計九時間。語学生は、通常四年はかかる内容を六ヶ月の短期間で徹底的に叩き込まれた。それでも足りない者は、十一時の就寝後トイレに入って勉強を続けた。情報語学兵の任務は、地図や戦闘計画、将兵の日記や手紙の翻訳、解説、通信傍受、電話盗聴、投降勧告、捕虜の尋問などである。」⁽¹⁶⁾といた極限に挑む凄まじさであった。

天羽賢治のモデルと目される伊丹明が「剛直な薩摩隼人の風貌⁽¹⁷⁾」を持ち、「郷中教育で志操を錬成⁽¹⁸⁾」した様子は、木梨幸三が概要をのべているが、彼をキャンプ・サベージの陸軍日本語学校に教官として招聘したジョン・フジオ・アイソが「伊丹の加州毎日の社説を読んでおり、中でも伊丹が「優れた日本人であることが、最良のアメリカ市民である⁽¹⁹⁾」との見解に共鳴する一人であった」事実については、ステープ・鮫島が記述している。ここで述べられる加州毎日が加州新報、ジョン・フジオ・アイソがハーバード大学で法学の学位を得て、弁護士をしていた経歴を持つ⁽²⁰⁾という点に照らし合わせてみた場合、オーソン相川として『二つの祖国』に登場していることは明らかである。

アメリカにおける日系二世に日本留学する一群があった事実については、森本豊富が触れている。それによると、「第2次世界大戦前の10年弱の間に米国日系二世が大挙して日本留学をした原因⁽²¹⁾」は「日米間の為替相場の急転による円安ドル高の影響、米国での大恐慌後の就職難といった経済事情に依るところ⁽²²⁾」に加えて、「送り出す側にいた一世の二世に対する「日米平和の楔」としての熱い期待⁽²³⁾」があり、「バイリンガル、バイカルチュラルな人材としての親の期待と、目前にせまった就職問題、結婚問題という個人的動機が二世をして日本留学に導いた⁽²⁴⁾」とのことである。賢治は、日系二世として、父親・乙七の期待を背負い、小学校3年から大学予科2年まで10年余りの間、日本で教育を受けたが、東栄一郎が言及するように「アメリカ政府から見ると、精神的には日本人であっても市民としての権利を持つ婦米二世は、国家安全保障上、移民世代よりもはるかに危険⁽²⁵⁾」に映ったのである。けれども、そのような婦米二世こそが、日本人兵士の心情を理解し、その心を解き放ち、米軍にとって必要な情報を入手するのに最も適した人材であった。ならば、婦米二世を米軍にとって都合のよいように教育する必要が戦いに勝利するには必要不可欠だったのである。

佐藤けあきは、元語学兵を対象にしたインタビュー調査から、「語学兵の語りから二世従軍の英雄物語を考えることで明らかになったのは、コミュニティにおいて重要な記憶は犠牲的行為に象徴される忠誠心や愛国心の記憶であり、捨象されてきたのは「英雄」や「懸け橋」のレッテルの陰で日本と戦ったり「占領者」として活動しなくてはならなかった語学兵のジレンマや苦悩であった。」⁽²⁶⁾と論じている。

このように、米陸軍日系二世の語学兵、情報員の存在や伊丹明に関する研究は近年になって、大きく進展してきている。その成果に学ぶとすれば、山崎は入念な調査に基づき、キャンプ・サベージにおける日本語教育の状況を『二つの祖国』に書き込んでいった様子が明らかとなるのである。

以上のことから、キャンプ・サベージにおいては、日系二世を語学兵に仕立て上げるべく、徹底した日本語・日本事情教育が施されていた事実が浮かび上がってくる。⁽²⁷⁾では、そのような歴史的事実と天羽賢治の日本語教師としての活動は、一体どのような交わりを見せるのであろうか。以下、考察を進めたい。

3 日本語教師としての天羽賢治

天羽は日系二世の代表ではなく、極めて個別的な存在である。婦米二世と純二世は全く異なるし、婦米二世の中でも、日英両語に通じ、また日本人の精神性をアメリカ人に説明し、教育できる能力を持った人物となると、稀な存在であると言って

よい。それほどまでに、賢治の優秀さは際立っているものであり、オーソン相川が述べるように、教官として真に適確な人物は彼を置いて他には探し出すことが困難であるとさえ言い得たのである。

賢治が鹿児島で受けたのは、通常の初等・中等教育に加える形で実践された「『健児の舎』の特異な教育」(26)で「俗に“郷中教育”と呼ばれ、六歳から十三歳までを稚子、十四歳から二十三歳までを二歳として組織し、学校の外で、漢文の素読から漢詩、剣道、弓道など文武両道を修めさせる場であった。」(26-27)が、知育だけでなく、「二六時中、同じ年頃や少し年上の人たちと一緒に過ごししながら身心を鍛え、礼儀、武芸を身に付け、勉学に勤しみ⁽²⁸⁾」といった徳育に実技も含めて国家主義的であり、滅私奉公を旨とするものでもあり、この「農村における村落共同体の年齢階梯制の武士的現れとして」、また「若者組の修養的組織として」の郷中教育が人格形成に与えた影響は、計り知れない。また、賢治は弓道の中に日本人の精神性を見出しているが、これも武士としての重要なたしなみである。作品冒頭で天羽は29歳に設定されており、帰国後約10年を経た頃から物語が始まるが、小学校3年生から大学予科2年までの10年余りを日本で過ごした体験が賢治に日本人的な魂を呼び覚ますようになったし、その結果として進学することになった「日本精神を昂揚する大東大学」(27)は、漢学教育の総本山的な存在として確固たる位置を占めていた。

日本語学校において、教科書として使用されているのは、前述の通り長沼直兄による『標準日本語讀本』⁽³³⁾である。この教科書は、山下秀雄が述べるように「1940年から1941年にかけてアメリカにおいて大々的に採用され、写真製版による「海賊版」となり、もっとも普遍的な、権威ある教科書として広がっていった」⁽³⁴⁾のであり、『二つの祖国』の中では卷三の「父歸る」⁽³⁵⁾と卷六の「武士道」⁽³⁶⁾について賢治が教授したという場面が作品内では描かれている。当然ながら「武士道」が扱われるに際しては、後述する新渡戸稲造の『武士道』⁽³⁷⁾が引き合いに出されたと考えられる。

長沼讀本に習熟してこそ、日本兵を尋問したり、彼らから押収した文書を解読して、何が重要かを見極めながら上官に報告し得た。よって、卷一から卷七まで全巻を学ぶ必要があったはずである。生徒がサ行変格活用の動詞「する」の活用形を覚えようとする場面がある(361)が、動詞の活用語尾習得に苦心している様子がかげえる。また、長沼読本卷三の第三課「父歸る(上)」(菊池寛)に出てくる次の場面、

母 仕立物を届けに行つた。

賢一郎 まだ仕立物をして居るの。もう人の家の仕事なんかしなくてもいいの⁽³⁸⁾に。

生徒は「仕立物」を「しりつもの」と発音してしまい、日本語の読みの多様さに舌

を巻くが、このレベルを突破できるようでなければ、候文の読解はおぼつかない。漢字の読みや動詞の活用にしどろもどろする生徒の日本語力は日本における尋常小学校での学習内容がようやく習得できる程度であった様子が窺える。

けれども、そのような生徒の前に立ちはだかるのは、文法や語彙だけではなかった。例えば、字体に関しては、楷書に加えて、行書、草書についても学ばなければ、前線の兵士が何を訴えようとしているかが分からない。ガダルガナルから捕虜文書が到着するや、オーソン相川はそれをすぐに最優秀クラスである A ランクのセクション I の授業で使用するよう命じるが (347)、内容の理解に先立って草書体読破という難関が生徒を襲う。戦地で追いつめられた兵士が急いでしたためる文書は草書体によるものが圧倒的に多かったため、文字学習へと生徒を導くことも、重要な仕事となっていた。教授法についての言及は取り立てて見あたらないが、マクノートンが「日本語特訓カリキュラムで同じ内容の反復につぐ反復で学生を教育⁽³⁹⁾」したと論述しているところから想像するに、オーディオ・リングル教授法 (Audio-Lingual Method) と後の日本語教育史で位置付けられる方法が取り入れられていたと考えられる。

賢治は、教科書に加えて、日本軍が兵士に持たせている軍人勅諭⁽⁴¹⁾、作戦要務令⁽⁴²⁾、戦陣訓⁽⁴³⁾といった文献を授業で取り上げる。日本軍兵士が玉砕を避けられない状況になっても、捕虜になることを嫌い、徹底抗戦する背後にある精神的拠りどころが教育にある様子を探り当てているのである。その精神性は、武士道に依拠しているというのが賢治の理解であり、この概念を生徒たちに分からせようとする。

軍人勅諭は「我国の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある⁽⁴⁴⁾」とした上で明治天皇のために誠を尽すべきことが「朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるへき朕か國家を保護して上天の恵に應し祖宗の恩に報いまゐらす事を得るも得ざるも汝等軍人か其職を盡すと盡さゝるとに由るそかし⁽⁴⁵⁾」と述べられたものであるが、「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ⁽⁴⁶⁾」との死生観を信じるように導くのである。この考え方は、後の作戦要務令にも綱領の三として、「必勝の信念は、主として軍の光機ある歴史に根源し、周到なる訓練を以て之を培養し、卓越なる指揮統帥を以て之を充実す⁽⁴⁷⁾」とあり、その歴史や指揮統帥の大本に天皇への絶対服従が求められる姿勢に継承されている。

また、軍人勅諭に「軍人は忠節を盡すを本分とすへし凡生を我國に稟くるもの誰かは國に報ゆるの心なかるへき⁽⁴⁸⁾」とあれば、日本兵がなぜ滅私奉公的発想に支配され、自らを捨ててまで負け戦に自己を捧げているのかを想像しない訳にはいかなく

なる。更には、「抑國家を保護し國權を維持するは兵力に在れば兵力の消長は是國運の盛衰なることを辨へ世論に惑はず政治に拘らす只々一途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ」⁽⁴⁹⁾と云って命を捨てる行動様式が強要されており、その教えに盲目的に従って訓練された軍隊だからこそ、容易には屈服しない頑強さを持ち合わせている様子に対しても、理解が深まってくる。「軍人は戦に臨み敵に當るの職なれば片時も武勇を忘れてよかるべきか」⁽⁵⁰⁾という教えに洗脳されている軍隊だからこそ、片時も怯むことなく敵に立ち向かってくるために、アメリカ軍としては身の危険を常に意識して対峙しなければならない状況は賢治だからこそ生徒に理解させられたのである。

一方、戦陣訓から引用されるのは「本訓其の二」の第八「名を惜しむ」に登場する「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」⁽⁵¹⁾という箇所であるが、日本軍が徹底抗戦する背景には、天皇のために死力を尽くし、命をも惜しまない姿勢が見受けられる点に言及が進んだと考えられる。即ち、「序」では軍人勅諭を受け継いで現在身を置いている軍隊が皇軍であり、必勝すべきことが「夫れ戦陣は、大命に基き、皇軍の神髓を發揮し、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝ち、遍く皇道を宣布し、敵をして仰いで御棣威の尊嚴を感銘せしむる処なり。されば戦陣に臨む者は、深く皇国の使命を体し、堅く皇軍の道義を持し、皇国の威徳を四海に宣揚せんことを期せざるべからず」⁽⁵²⁾と述べられている様子は理解させる必要があったはずである。「本訓其の一」では「第三 軍紀」に「特に戦陣は、服従の精神実践の極致を發揮すべき処とす。死生困苦の間に処し、命令一下欣然として死地に投じ、黙々として献身服行の実を挙ぐるもの、実に我が軍人精神の精華なり」⁽⁵³⁾とあって命を捧げることを厭わない姿勢が強調されている。「第五 協同」では、「諸兵心を一にし、己の任務に邁進すると共に、全軍戦捷の為欣然として没我協力の精神を發揮すべし」⁽⁵⁴⁾として身を粉にして軍のために尽くすべきこと、「第六 攻撃精神」では、「勇往邁進百事懼れず、沈着大胆難局に処し、堅忍不拔困苦に克ち、有ゆる障碍を突破して一意勝利の獲得に邁進すべし」⁽⁵⁵⁾としてどのような状況下にあっても恐れないこと、「第七 必勝の信念」では天皇の軍隊が勝つべきはずであることが「勝敗は皇国の隆替に關す。光機ある軍の歴史に鑑み、百戦百勝の伝統に対する己の責務を銘肝し、勝たずは断じて已むべからず」⁽⁵⁶⁾と語られる⁽⁵⁷⁾。また、「本訓其の二」では、「第七 死生観」として、「死生を貫くものは崇高なる献身奉公の精神なり。生死を超越し一意任務の完遂に邁進すべし。身心一切の力を尽くし、従容として悠久の大義に生くることを悦びとすべし」⁽⁵⁸⁾として死を恐れない姿勢が尊ばれる。

これらのアメリカ側から見て奇異に感じられる記述の背景にある考え方は武士道に基づくものであるとされた。ならば、武士道の日系アメリカ人への受容のされ方が問題となろう。具体的な名前こそ登場しないものの、この概念は新渡戸稲造によって英語で著された著作によっていると考えられる。帝国陸軍を構成する各個人の行動規範には、アメリカ側から見て理解不能な点があるが、その根本的発想は日本語学校の生徒にも英語で読了可能な『武士道』の発想に基づくものであると捉えられるのである。同書は最初から英語で執筆されているので、生徒に原文で読ませ、日本語で解説する授業を行ったとしても、受け入れられ易かったはずである。というのも、「『武士道』はキリスト教的価値観によって抽出された、江戸期における日本の武士道精神を基盤とする道徳体系を記述した書であり、全世界のキリスト教徒、またはキリスト教的価値観を持った人々を読者として想定し、書かれたものである。⁽⁵⁹⁾ 訳で、新渡戸は「独自の判断で武士道を取捨選択し、近代的道徳に結びつく点のみを慎重に紡いだ」⁽⁶⁰⁾ ために同時代のアメリカ人に受容されやすい記述になり得ていると言えるからである。

例えば、武士道の定義は Chapter 1 Bushido as an Ethical System⁽⁶¹⁾ [第一章 道徳体系としての武士道]⁽⁶²⁾ において *Bu-shi-do* means literally Military-Knight-Ways — the ways which fighting in a word, the “Precepts of Knighthood,” the *noblesse oblige* of the warrior class.⁽⁶³⁾ [『武士道』は、語句の意味で言えば、戦う騎士の道、——すなわち戦士がその職業や日常生活において守るべき道を意味する。ひと言で言えば、「戦士の掟」、つまり戦士階級における「ノブレス・オブリージュ *noblesse oblige* [高貴な身分に伴う義務]」のことである。⁽⁶⁴⁾ と記述されている。その上で、死よりも名誉を貴ぶ姿勢に関しては、Chapter 8 Honor⁽⁶⁵⁾ [第八章 名誉] において *Life itself was thought cheap if honor and fame could be attained therewith: hence, whenever a cause presented itself which was considered dearer than life, with utmost serenity and celerity was life laid down.*⁽⁶⁶⁾ [もし名誉と名声が得られるならば、生命さえ安価だと考えられた。それゆえ、生命より価値があると考えるに足るものがあれば、きわめて心穏やかに、そしてすみやかに生命を棄てたのである。⁽⁶⁷⁾ と述べられるのである。また、刀が武士の魂であることが Chapter 13 The Sword, the Soul of the Samurai⁽⁶⁸⁾ [第十三章 刀、武士の魂] で *Bushido made the sword its emblem of power and prowess.*⁽⁶⁹⁾ [武士道は、刀をその身分と武勇の標章とした。]⁽⁷⁰⁾ と記述されている。これらはアメリカで生まれ育ち、アメリカ人的なものの発想に馴染んできた生徒たちには奇異に映ったと考えられるが、婦米二世で日英両言語文化からテキストを読み解く力量を持った賢治であればこそ、その落差を教授し得た内容なのである。

日本事情の教育として、当時の帝国陸軍における軍人の発想や、ものの考え方はどうしても生徒に理解させる必要があった。これには相当程度日本での教育を受け、しかも英語に堪能な婦米二世でなければ、教授不可能だった。日本軍の作戦要務令、戦陣訓、軍人勅諭の読解を通して、当時の日本兵が持っていた発想への理解が戦場で日本兵と対峙するアメリカ兵には必須であった。天皇のために戦うという発想は「朕惟フニ我力皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」とした教育ニ關スル勅語⁽⁷⁾によって学校教育の段階から当時の日本人に深く浸透していた。また、捕虜になるぐらいなら自決するといった行動様式は、アメリカ人から見れば、奇異なものにしか映らないが、逆にそうだからこそ、教育によって理解させる必然性があるのである。

米軍、ひいては米国政府の政策としては、そのような日本人兵士の発想が理解できる二世を如何にして増やすかが問題であった。戦場で捕虜となることを嫌う兵士の精神的拠りどころとして「生きて虜囚の辱めを受けず」と教えた戦陣訓の精神が体现されていたことは疑いようがないが、死生観の強烈な兵士が持っていた使命感とは何かを二世兵士に教授し、日米の狭間で思考を揺らがせながら、勝ちを目指す米軍の論理へと生徒を導くことが賢治には課せられていた。

地理に関する教育状況を鑑みるに、日本人捕虜より米軍が必要な情報を入手するための作戦が見通されていた事実がうかがえる。対日情報戦は心理戦の様相を呈していた。所属部隊（師団・連隊）の規模や戦力状況を推察するために、さり気なく出身地に関する話題を口にするように生徒を訓練していく様子が描かれている。例えば軍事上の拠点であった広島を例にとると、軍港であった宇品港や呉、海軍兵学校の所在地であった江田島といった地名にまつわる話題を授業で積極的に扱い、「広島の山と川の名前」（383）を広島出身の生徒に答えさせながら、「地理というのは、心理戦の上で一つのテクニックとして使える」（384）事実に気付かせるのである。

賢治の日本語学校における生徒への教育内容は、自分自身が加治木と東京で受けた初等・中等教育を下敷きにしたものであったが、修身、教練、国語、漢文、地理、歴史など、日本事情を熟知させるためにはどうしても突破しなければならない知識であった。いずれも日本独特の知識で埋め尽くされていたために、婦米二世でなければ、学習についてはいけなかったと思われる。婦米二世である賢治が日本経験の浅い婦米二世に向けて日本に関する知識を日本語で教授するという営みは極めてマイノリティーな文化の再生産だが、それが戦時下であって情報戦で優位に立つことが至上命令だった米軍における日系人に求められた役割であった。

日本語学校卒業式での学生スピーチは漢文調の作文を東北訛で発音したものであった。そこまでネイティブに近い習得水準を満たす人材育成に寄与したことは、賢治の教師としての業績に他ならなかったと言えよう。

4 天羽賢治を取り巻く人々

賢治を日本語学校の教官へと導いたのは、かつて「アリゾナ砂漠の軍キャンプで賢治のヒヤリング（審問）を担当した審問官であり、サンタ・アニタ競馬場の仮集合センターに姿を現わし、ワシントンで日本からの対米暗号の解説をするように勧めた軍人」（333-334）のポップキッズ中佐と日本語学校主任教官の地位にあったオーソン相川であった。

オーソン相川は、「戦線で押収した日本側の作戦計画、部隊日誌などを翻訳することによって、日本軍の兵力、作戦を知る」（321-322）のは米軍にとって必須の案件で、「語学兵の働きによって長びく戦争を一刻も早く終結し、両国の犠牲者を少なくする」（322）使命が二世に課せられているとたまたみかけた。それでも、賢治が納得しなかったのを、日を改めて、ポップキッズ中佐を伴ってもう一度、賢治を説得する。その際には、「戦線で捕虜になった日本兵の扱いと尋問という困難な仕事が、語学兵に要求された」（335）とした上で、「日本人の心情や風習を熟知し、たとえば、鹿児島出身者には鹿児島弁で、広島出身者には広島弁の方言を使って問いかければ、ふと心が解けて話すかもしれない」（336）が「そこまで高度なことを教えられるのは、君をおいて他にない」（336）と持ち上げる。同時に現実的な問題も、「天羽君、自分自身のことだけでなく、少しは家族のことも考えるべきだよ、忠誠テストの答えはもちろん、日本語学校の教官になるか、ならぬかについても、すべて記録されて、その記録は何をするにも今後ずっとついて廻り、君の生涯を左右しかねない」（336）と述べて、十分に勘案すべきであると念を押す。

ところで、日本語学校の存在を賢治に知らせたのは、チャーリー田宮であった。チャーリーは後に昭和天皇と会見したことになるが、この点をもとにして実在の人物を言うならば、カン・田上ということになるが、チャーリーは日本語教官の仕事を抱くまでも将来のキャリアアップに必要なステップとしてしか考えない。椰子にハネムーンの際に語った野心が彼の精神的基盤である。事実、オーストラリアの「極東軍司令部付になる」（406）人事が伝えられると、「一瞬、血が湧きかえるような興奮を覚えた。」（406）のである。チャーリーは個々の生徒に関心がないため、「第三回の卒業式」（396）における「ビュッフエ・スタイルのパーティ」（399）でも「日頃、生徒たちを寄せつけない」（399）様子が裏付けられるかのように談笑

の場面はなく、卒業の晴れやかな場面に水を差すかのように「これで終りと思つたら大間違いだぞ、このあと君らはキャンプ・マッコイで六週間、みっちり軍事訓練を受けねばならない、それをパスするまで君たちにはほんとうの卒業はないんだぞ」(399)、「軍事訓練の教官はこの優しい日系の先生と異なり、百戦練磨^{れんま}の鬼軍曹^{おにくん}ばかりだから、甘くみると、すぐ営倉入りだぞ」(400)と更にプレッシャーをかけるかのような嫌味を重ねる。そこには、生徒の達成を労う心配りが全くなく、お前たちはまだまだだ、としてわざと卒業生を蔑視することで自己の優越性を誇示するような傲慢さや才能育成のプロセスに無理解な態度が前景化しているのである。その一方では、「来賓の白人たちが近くを通ると、誰^{だれ}かれなしに愛想のいい挨拶をし、卒業生たちは白^{しろ}けて一人減り、二人減りして行った。」(400)のであって、白人に媚びへつらう態度も卒業生をいらいらさせるのである。

このようなチャーリーの設定は意図的なもので、彼を描くことによって、一層賢治の純粋性、教育への献身、ひいては発想の崇高さが際立つ仕組みとなっている。同じくパーティの場面、「乾杯！」「前方^{チアーズ}で一際、高い歓声^{ひときわ}が起った。その方を見ると、天羽賢治とエミーを二十数人の卒業生たちが取り囲んで、陽気な笑い声をたてていた。」(399)様子からは賢治が生徒に慕われていた様子がよくうかがえる。というのも、賢治は自らが日本で体験した教育や体験を生徒に「再生産⁽⁷³⁾」させることこそが、日米戦を早期に終わらせる特効薬となり、日本語教師としての仕事は日米双方に利をもたらずという使命感に基づいて勤務していた。この発想はオーソン相川が日本語教官就任を賢治に要請した際に使用した論理でもある。教育実践では、鹿児島と東京での体験が財産となっていたはずで、チャーリーの消し去りたい広島での滞在とは異なる肯定的な日本体験が生徒にも伝授されているように見えるのである。

一方、賢治の妻・恵美子(エミー)も極めて功利的な発想の持ち主として描かれている。賢治が日本語教育に入れ込む様子そのものを馬鹿にする純二世のエミーはあくまでも悪妻として登場する。エミーは賢治の日本語教官就任を待遇改善問題としてしか見ていない。そこには、賢治がどのような気持ちでこの仕事に折り合いをつけ、割り切れないままに職務を遂行しているかという点への想像力が決定的に欠如している。日米両文化間で引き裂かれつつ、また肉親である父の乙七からは教官職の仕事に従事するのはスパイ要請への加担としか受け取られない中で重責を果たしている様子への敬意もない。エミーは、賢治が日本語学校教官就任の件を持ち出し、就任の可否について相談すると、強制収容所から抜け出せることのみ関心を示す。また、教官職を辞して、オーストラリアに赴任したい旨を切り出すと、気候がよいので暮らしやすいと応じるかと思いきや、前線に出たいと賢治がいうので驚

いて止めようとする。そのように賢治の心中と齟齬をきたし続けるエミーが描写されればされるほど、逆に広島在住経験に根差す日本文化に対する郷愁を持ち、カリフォルニア大学(173)で日本に関して学んだバックグラウンドを軸に帰米二世という立ち位置にある賢治の心中に想像力を巡らせられる井本椰子の純粋な様子が際立ち、結果的には賢治と椰子が結ばれていく話の展開に読者は引き込まれる設定となっているのである。

5 日本語教育から浮かび上がる戦略

山崎豊子が『二つの祖国』を描くに際して参考にした形跡が認められる島村喬の『二重国籍者⁽⁷⁴⁾』には伊村明彦が日本語教官になったという話は出てこないものの、伊村明彦と天羽賢治は共通の実在人物・伊丹明がモデルとなっている。伊丹の日本語教育に焦点を当てれば、帰米二世であり、鹿児島島の郷中教育で武士のたしなみを体得した上に、漢文教育に特化した大東文化学院で教養教育を受けていたからこそ、武士道の神髄を理解しており、その知見に基づいた授業を展開できる有能な日本語教官になり得たと解釈できる。生徒の日本語習得状況にばらつきはあったが、『二つの祖国』に話を戻せば東京裁判で同時通訳のモニターを賢治と共につとめるまでに成長する教え子(ケネス阿川)にも恵まれる成果を生んだのである。

日米交戦下におけるよい日本語教官とは、日本軍の作戦を見抜き、状況把握ができる情報を米軍にもたらしてくれる語学兵育成に貢献できる人材を意味していた。賢治はその精神世界が日本の軍国主義に染まっていると疑われかねないほど深い水準で日本の武士道や天皇崇拝に基づいた日本軍の兵士育成を解していたからこそ、その上をいく作戦を生徒に教授し得た。

純二世は日本語が話せても、軍人文化は「異文化」そのもので、メンタリティはどこまでもアメリカ人であった。「純二世」対「一世」の間には世代差に加えて、日米文化の違いが抜きがたく存在していた。その落差は「米兵」対「日本兵」の内面構造の差異にも似ていた。純二世は何とか日本語を話せはしても、日本兵の行動様式に根差す発想の理解にまでは対応できない。よって、帰米二世、それも日本滞在経験の長い生徒をいかに特訓して語学兵として使っていくかが米軍における重要な作戦となっていた。ある程度の日本語を習得しているレベルからでないと、語学兵として実践に供するまで育てられない。帰米二世の日本語では、漢文調の文章を読んだり、草書を理解したりするには程遠く、戦場で実践に供するためには特訓が必要だった事実は容易に想像できる。

大統領命令第9066号に従うことに何ら疑問を持たない純二世のメンタリティは、

アメリカ側が日系人を統率するには安心であったが、日本での教育を受けた経験を有する婦米二世にはなじまない。逆に乙七のように徹底して拒否する姿勢は頑固な一世にありがちだったが、アメリカ社会には馴染めず、現地では日本人コミュニティの中でしか生きられなかった。「忠誠テストの答え」(334)として「アメリカ市民としての義務を尽すか」という質問に対しては、イエス、天皇が組織する軍隊と戦うかには、ノウ」(334)と表明する天羽賢治のような存在こそが語学兵として“使える”“有能な”者が抱え持つ精神世界を体得していたのである。

天羽賢治がキャンプ・サバージで日本語教官となって、自らのコピーを養成する行為は有能な語学兵を輩出することにつながった。語学兵には、ただ単に日本語が理解できるだけでなく、日本兵が何を考え、どう行動するかが分かり、日本軍が置かれている状況を正確に米軍に伝えられるという能力までも習得した存在であることが期待されていた。

山崎豊子は日本精神を持つことを是としているというのは鶴飼清の立場であったが、ここでいう日本精神とは大日本帝国憲法を拠りどころとし、皇軍に所属する立場、命を軍に捧げて悔いを持たない生き方を完遂する若者の姿を彷彿させるし、そのような戦士の教官という立場にあった賢治が一層純粋で気高い存在として規定されるのである。とすれば、自殺したモデル・伊丹明をフィクションとして再創造するのが小説構造を劇的に演出するのに都合がよかったと考えられるし、『二つの祖国』にあっても賢治を最終的には自殺させるのである。

6 結語

本稿では、天羽賢治がミネアポリスのアメリカ陸軍情報部日本語学校における語学兵の養成に関わった点に着目し、彼がどのような日本語教育を生徒に施したかを論じた。賢治は日本語学校の教師として有能であり、その教授内容は日本在住10年間で身に付けた教養教育だった事実が浮かび上がってくる。日本人としての感じ方を体得していることこそが、婦米二世としての賢治が持つ専門性であり、アメリカ的な考え方に支配されている生徒に日本語・日本事情を教えることで見えてくる自画像とは、日米双方の発想が分かるだけに引き裂かれたかのような心境に懊悩する姿であった。

一方、生徒は賢治の体得した日本での経験を日本語学校において追体験しているとも言えるが、武士道や作戦要務令、また「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓の教えに溺れることはなかった。日本軍は徹底抗戦を最後まで続けるという事実を賢治が教室で教えた際、生徒は身の危険を感じずにはいられなかったが、戦争

を一刻も早く終わらせることに貢献するのが語学兵に課せられた責務と自覚した二世兵士が賢治の門下から多数輩出した。その結果は、バイリンガルを超えるバイカルチュラルな存在としての賢治を強調する効果を生んでいる。賢治は戦場に語学兵として出る生徒に対して、極めて実践的な日本語教育を展開し、余人をもって代えがたい教育内容を教え得た。

このテキストが書き継がれ、発表されていった頃の時代状況における意味や効果に言及するならば、日本による真珠湾攻撃から40年が経ち、高齢になった当事者が痛惜の念を禁じ得なかった太平洋戦争に関する体験の琴線に触れる言説を欲しており、その欲望を満たす役割を『二つの祖国』は担っていたとみることができよう。日本では戦時中には敵国語として英語教育を禁じられたのは裏腹に、言語問題が戦いの伏線に存在していた。敵国語の習得に日系の婦米二世が従事したという日本語教育をめぐる表象が含意するのは、敵を制するにはその言語文化や思想性を突き、その上を行く作戦に基づく攻撃が必要であるという事実他に他ならない。日本認識の深化が戦時においてアメリカ側に強く意識されていた、その実践がアメリカに勝利をもたらしたという事実気づかせる役割をテキストが担ったのである。

注

- (1) 柳田由紀子『二世兵士 激戦の記録 日系アメリカ人の第二次大戦』（新潮社 2012年 7月 40頁）は、「二世の「二重苦」はそもそも言語にあった。彼らは一般に、家庭で親とは日本語、きょうだいとは英語で、家の外にあっては英語で話した。」としている。
- (2) 塚本美恵子「日系アメリカ人の家庭教育」、小島勝編『在外子弟教育研究』玉川大学出版部 2003年2月 75頁
- (3) 同上 88-89頁
- (4) 柳田は婦米を「アメリカで生まれ、日本で教育を受けた後、アメリカに戻った日系人」（注1、75頁）と定義している。
- (5) 同じく柳田によれば、「『婦米』は、二世の約四分の一を占めるといわれるが、二世の中でも、日本語レベルが高いのはなんといっても彼らだった。当然、陸軍は「婦米」に注目し、既存兵士だけでなく、収容所にも足を運び語学学校への入学を勧めた。」（注1、75頁）とのことである。
- (6) 門池啓史『日本軍兵士になったアメリカ人たち 母国と戦った日系二世』元就出版社 2010年2月 27頁
- (7) 佐藤けあき「忠誠と苦悩の語り 日系アメリカ人二世語学兵の従軍・進駐経験」、『日本オーラル・ヒストリー研究』第11号 日本オーラル・ヒストリー学会 2015年9月 106頁
- (8) 長沼直兄『標準日本語讀本 巻一～巻七』は、財団法人・言語文化研究所による日本語教育資料叢書復刊シリーズ第1回として1997年10月に復刊され、今日も閲覧可能な形を留めている。

- (9) 日本語教育学会編『日本語教育ハンドブック』大修館書店 1990年3月 115-117頁。
執筆は川本喬。
- (10) ジェームズ・C・マクノートン、森田幸夫訳『もう一つの太平洋戦争 米陸軍日系二世の語学兵と情報員』彩流社 2018年8月 145頁
- (11) 同上 146頁
- (12) 同上 146-147頁
- (13) 同上 146頁
- (14) 同上 147頁
- (15) 同上
- (16) 注1 78頁
- (17) 木梨幸三『デイブ・伊丹明の生涯 極東国際軍事裁判秘史』パル出版 1985年8月 50頁
- (18) 同上 55頁
- (19) 注10 123頁
- (20) 武田珂代子『太平洋戦争 日本語課報戦 言語官の活躍と試練』筑摩書房 2018年8月 27頁
- (21) 森本豊富「第二次世界大戦前における米国日系二世の日本留学事情」、「駿河台大学論叢」第11号 駿河台大学 1995年11月 61頁
- (22) 同上
- (23) 同上
- (24) 同上
- (25) 東栄一郎「二世の日本留学の光と影 日系アメリカ人の越境教育の理念と矛盾」、吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』日本図書センター 2005年3月 243頁
- (26) 注7 122頁
- (27) 日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』（大修館書店 2005年10月）では、アメリカでは「太平洋戦争の勃発とともに1941年から軍事機関で軍人を対象に行われた日本語教育が始まりである」（1004頁、執筆は當作靖彦）とされており、本稿は黎明期の状態に関する分析であると位置付けられる。
- (28) 塩野時雄『薩摩の郷中教育に学ぶ最強の後継者育成』幻冬舎 2022年4月 45頁
- (29) 神田嘉延「薩摩の郷中教育研究の基本視点」、「鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要」第1号 鹿児島大学稲盛アカデミー 2009年12月 127頁
- (30) 神田嘉延「薩摩の郷中教育 井水地方を中心に」、「鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要」第2号 鹿児島大学稲盛アカデミー 2010年12月 68頁
- (31) 安藤保『郷中教育と薩摩土風の研究』（南方新社 2013年9月）が郷中教育の史的変遷について概説している。
- (32) モデルは文字通りで現在の大東文化大学（当時は大東文化学院）である。伊丹明も同校予科に進学している。
- (33) 多仁安代『日本語教育と近代日本』岩田書院 2006年4月 230頁
- (34) 山下秀雄「第1回復刻版の原本と長沼直兄」、「（財）言語文化研究所 日本語教育資料叢書 復刻シリーズ第1回 長沼直兄著『標準日本語讀本』巻一～巻七1931～34 First Lessons in Nippongo 1945 解説』財団法人言語文化研究所 1997年 82頁

(35)長沼直兄『標準日本語讀本』卷三

(36)長沼直兄『標準日本語讀本』卷六

(37)Nitobe, Inazo. *Bushido: the soul of Japan, an exposition of Japanese thought.*

Philadelphia: The Leeds and Biddle Company, 1900. 初版が1900年に出版された状況の検証は、以下に詳しい。中島正道、佐藤葵平、中島めぐみ「新渡戸稲造『武士道』の書誌事項をめぐる混乱について」、「三田図書館・情報学会研究大会発表論文集2008」慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻 2008年9月73-76頁。英文による同書の解説には Bennett, Alexander, *Bushido Explained: The Japanese Samurai Code: A New Interpretation for Beginners*, Tokyo: Tuttle Publishing, 2019. があり、日本語訳としては、矢内原忠雄訳『武士道』（岩波書店 1938年10月）をはじめ、岬龍一郎訳『武士道』（PHP研究所 2005年8月）、山本博文訳・解説『現代語訳 武士道』（筑摩書房 2010年8月）などがある。全17課の目次を掲げると、以下ようになる（日本語訳は山本博文による）が、賢治はこの考え方が日本軍の基盤に存在するという立場に立つ。

Bushido as an Ethical System（道徳体系としての武士道）

Sources of Bushido（武士道の源）

Rectitude or Justice（正しい判断、または正義）

Courage, the Spirit of Daring and Bearing（勇気——豪胆と忍耐の精神）

Benevolence, the Feeling of Distress（思いやり——痛みの感情）

Politeness（礼）

Veracity and Sincerity（誠）

Honor（名誉）

The Duty of Loyalty（忠義）

The Education and Training of a Samurai（武士の教育および訓練）

Self-Control（自制心）

The Institutions of Suicide and Redress（切腹と敵討ち）

The Sword, the Soul of the Samurai（刀、武士の魂）

The Training and Position of Woman（女性の教育と地位）

The Influence of Bushido（武士道の影響）

Is Bushido Still Alive?（武士道はまだ生きているか）

The Future of Bushido（武士道の未来）

(38)長沼直兄『標準日本語讀本 卷三』開拓社 1932年10月 14頁

(39)注10 174頁

(40)注9で示したアーミー・メソッドは、その後オーディオ・リングル教授法として日本語教育史に位置づけられる展開を遂げた。カッケンブッシュ寛子によれば、この方法は「第2次世界大戦中のアメリカでの構造言語学、行動主義心理学、軍隊での外国語集中教授などが背景となって発展した」（カッケンブッシュ寛子「日本語教育方法論」、奥田邦男編『教職科学講座 第25巻 日本語教育学』福村出版 1992年9月 26頁）とのことである。

(41)明治天皇（藤本泰久訳）『現代語訳 軍人勅諭』（キジバト社 2019年9月）で全文を確認できる。

(42)大橋武夫解説『作戦要務令』（建邦社 1976年11月）で全文は確認できるが、その詳細

- な解説としては熊谷直『《詳解》日本陸軍作戦要務令』（朝日ソノラマ 1995年5月）がある。
- (43) 東条英樹（藤本泰久訳）『現代語訳 戦陣訓』（キジバト社 2019年9月）で全文を確認できる。
- (44) 注41に同じ
- (45) 同上
- (46) 同上
- (47) 大橋武夫解説『作戦要務令』建帛社 1976年11月 9頁
- (48) 注41に同じ
- (49) 同上
- (50) 同上
- (51) 注43に同じ
- (52) 同上
- (53) 同上
- (54) 同上
- (55) 同上
- (56) 同上
- (57) 精神性を重んじる姿勢は、軍人勅諭に「心たに誠あれば何事も成るものそかし」とあるだけでなく、昭和期に発表された統帥綱領（1928年）においても「最近の物質的進歩は著大なるをもって、みだりにその威力を軽視すべからずといえども、勝敗の主因は依然として精神的要素に存すること古来変わるところなし。」（大橋武夫解説『統帥綱領』建帛社 1972年2月 356頁）として終始一貫して極めて強調されている。また、作戦要務令でも熊谷が「責任観念、意志力、実行力、独断能力、困難な状況の克服力など、精神的なものを強調する」（熊谷直『《詳解》日本陸軍作戦要務令』（朝日ソノラマ 1995年5月）という評価を下している通りである。
- (58) 注43に同じ
- (59) 船津明生「明治期の武士道についての一考察 新渡戸稲造『武士道』を中心に」、『言葉と文化』第4号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 2003年3月 28頁
- (60) 長尾剛『日本がわかる思想入門』新潮社 2000年10月 260頁
- (61) 以下に掲げる引用は、Nitobe, Inazō, *Bushido: The Samurai Code of Japan*, Tokyo: Tuttle Publishing, 2019. による。この箇所は同書57-63.である。
- (62) 日本語訳は注37の山本博文訳によった。以下も同様である。
- (63) 注61 59.
- (64) 山本博文訳・解説『現代語訳 武士道』筑摩書房 2010年8月19-20頁
- (65) 注61 105-110.
- (66) 同上 110.
- (67) 注63 95頁
- (68) 注61 144-148.
- (69) 同上 144.
- (70) 注64 144頁

(71)教育勅語（明治23年10月30日）

(72)注10 611頁

(73)文化を教育によって次世代に再生産させるシステムについては、ピエール・ブルデュー、ジャン＝クロード・パスロン、宮島喬訳『再生産 教育・社会・文化』（藤原書店 1991年4月）に詳しい。

(74)島村喬『二重国籍者』（原書房 1967年8月）と『二つの祖国』の比較は、鶴飼清『山崎豊子問題小説の研究 社会派「国民作家」の作られ方』（社会評論社 2002年11月70-92頁）で試みられ、両者共に実在の伊丹明がモデルであると指摘されている。『二つの祖国』の発表と時を同じくして、島村喬『東京裁判秘史 日系通訳官の凄絶な死』（ゆまにて出版 1983年9月）と島村喬『実録・山河燃ゆ』（ゆまにて 1983年12月）が出版されており、島村は伊丹明をモデルに作品化したのは自らが先駆者であるとのメッセージを暗に発している。伊丹明に関する包括的な伝記は、ステイブ・鮫島『天皇を救った男 アメリカ陸軍情報部・日系2世 伊丹明』（南方新社 2013年8月）[彼の日本語教師としての体験は123-127頁に記載されている。]を待たねばならなかった。

(75)鶴飼清『山崎豊子問題小説の研究 社会派「国民作家」の作られ方』（社会評論社2002年11月 290頁）は、東京裁判に関する記述の場面の考察から「膨大な資料から汲み出された物語は、単純に日本精神、軍人精神、さらには国家主義の礼讃でしかなかった」としている。

付記

本文の引用は、『山崎豊子全集 第16巻 二つの祖国(-)』（新潮社 2005年4月）によった。引用末尾に付した番号は、同書における頁数を指している。

（とくなが・みつひろ 福岡工業大学教授）